

「信念」周辺

大谷大学講師 寺川俊昭

「信念」とは改めていうまでもなく、清沢満之が自分の信仰をいい表わした言葉である。この「信念」をめぐって、一二の断想を述べてみたい。

清沢満之が自覺的に教団人として生きることを決意したのは、恐らくは京都尋常中学校に校長として赴任することとなった時である。それとほぼ時を同うして、彼は自ら「ミニナム・ボンブルの実験」と名づけた奇妙な、しかし徹底した生活を始めている。これは周知のように、夫人を遣ざけ、長髪を落とし、洋服を麻の衣に更え、更に魚肉を断ち、煮炊を止め、最後には蕎麦粉を水で練って松脂をそえて食べるという、極端に禁欲的な生活の実行なのである。昨日のハイカラな明治の文学士は、こうして、苦行僧の倅さえ堪えた乞食沙門然とした姿に一変して行く。ミニナム・ボンブルとは、生活の最少限の可能ということであるが、この時代の号である「骸骨」に相応しく、彼は生活の皮肉を破って、人間がいのちを維持することのできるその限界点を確めるために、徹底した実験を試みたのである。

このミニナム・ボンブルの実験について、殊に私に思われることは、清沢満之がこれを始めた動機である。通常このことは、彼自らが「外俗内僧」といった、その僧の心、いわゆる出家修道の精神を実証しようとしたのだと解されている。けれどもこれと共に、彼を動かしたもっと切実な動機は、恐らくは真の教団回復の

志願ではなかったであろうか。何となれば、教団に自覺的に立った時、清沢満之がいわば肌を通して実感したことが、「僧風の衰頹」であり、僧侶に対する不信の声であったからである。僧風の廃頹にしろ、僧侶不信にしろ、それは実は教団が社会から信頼性を喪ったという事態を表わすものであろうが、この、教団の信頼性の喪失という状況の中に立って、彼は「僧風の刷新」即ち、真の教団の回復を願って、あの厳しい修道生活に入って行ったのだと、了解することができる。そこに清沢満之の教団人としての、いやむしろ一箇の人間としての、誠実さがあった。

後になって彼は、骸骨時代のこの禁欲的努力を、「自力の迷情」といい、「あの頃の自分は我慢の極点にあった」といつて、ひるがえし棄て去っている。しかしながら若しミニナム・ボンブルということをして、いわゆる生存の極限の追求というに止めず、更に、人間のいのちを「いのち」たらしめるためには、最少限が必要であるのか、ということの追求であると解するならば、このことはいわゆる苦行時代だけではなく、実は生涯を通しての清沢満之の大きな課題ではなかったろうか。これを求め求めて、遂に「我が信念」、即ち如来を信ずる心に到達したのだと、いうことはできないであろうか。とするならば、如来を信ずると告白される心こそ、実はまさしく、人間存在のミニナム・ボンブルであるというてよいのであろう。

このことについて多田鼎は、「清沢先生は生活はミニナム・ボンブル、信仰はマキシナム・ボンブル」と語っている。けれども私は、ミニナム・ボンブルということをも前述のように解するならば、信念こそ人間存在のミニナム・ボンブルであるということこ

そ、清沢満之が戦い取った確信であると了解するものである。

従っていわゆる清沢以後においては、信仰とは生活の上に何かを余計に加えるのではなくて、実はその生活そのものを成り立たしめる、そういう意味をもつものである。これなくしては生活は、実は真に生活とするに価しない空虚なものであり、信仰とは、人間存在の全領域を、根底から意味づけるものである。これによって始めて、我々の生活は本当に生活と呼ぶに価する意味を獲得する。如來を信ずることにおいて、生死する我々の生存は、生死するままに、「絶対無限の妙用に乗託して、任運に法爾に此現前の境遇に落在」する「新しき存在」として誕生するのであって、ここに自覚としての信の意味が、見事に回復されることとなつたのである。

この「信念」の表明は、恐らく絶筆「我が信念」の、卒直な信の表明に至って絶頂に達するのであるが、清沢満之自身が「我は此の如く如來を信ず」と題したこの信仰告白は、如來を信ずるという、信念の根本問題にいて、極めて明確な内容を与えている。この最初の題からも知られるように、如來を信ずる心は「我信ず」といふ切ることができるものであるが、しかし、如來を信ずるとは、一体どういうことであるのか。

「我が信念」はこのことについて、如來とは「私に対する無限の慈悲であり、無限の智慧であり、無限の能力である」と述べ、「私の信念は、無限の慈悲と、智慧と、能力との實在を信ずるのである」と告白している。ここで如來を、私に対する無限の慈悲等と表明したのは、独自の深い認識が秘められているのであって、この点は別の「宗教は主観的事実なり」という文章において

述べられた「強いて言えば、私共は神仏が存在するが故に神仏を信ずるのではない、私共が神仏を信ずるが故に私共に対して神仏が存在するのである」という、極めて大胆な表明に明確に示されている。これによって彼は、如來を信ずるといふ時、我々の常識的思考が常に陥る一つの辺見、即ち我を離れて實在する如來という如來の實體視を、「客観妄」として打ち破り、信仰の事實を嚴密に表明しようとしたのである。

ここに告白されている、「無限の慈悲と、智慧と、能力との實在を信ずる」とは、どのようなことであろうか。無限の慈悲とは、彼自身の了解に従うならば、それは私をして大いなる平穩と安樂とを得しめるところの、限りない愛の用らぎである。同様に無限の智慧とは、私の邪智邪見の迷妄を限りなく破つて行き、自分を真に無智を以て安んぜしめる大いなる用らぎであると告白されている。そして、無限の能力とは、この、真面目に生きようとすれば、この業繋の世界の中で、身動き一寸もすることができない私を、しかも虚心平氣にこの世界に生死せしめるところの、力の根本であるというている。

このような大いなる力、用らぎが、今現に私を生かしている。重い人間業を背負うて苦悶している私が、しかもそのままに、任運に法爾に、此の現前の境遇に落在するものたらしめられている。現前の私を生かすこの根源的な力あるいは用らぎが、如來といわれるのであり、それが疑ふことのできない事実として、この私を生かしている、この事実が如來の實在といわれているのである。従つて如來を信ずるとは、この事実に疑いがないこと、即ちはっきりと目覚めることに外ならないのである。我信ずとい

う我は、決して自我ではない。若し自我であるならば、如来も亦実体となつてしまふであらう。そうではなくて、我如来を信ずという我とは、清沢満之が別の機会に、「自分は何ものも主張しようとするものではない。ただ如来の前にひれ伏して、自分の無智無能を懺悔するばかりである」と告白したような我であり、いわば砕かれた我である。だから、如来を信ずる心は、自我の破れた心、自己主張だけの人間の中であつて、本当の意味で開かれた心、公の心ということができる心である。この自我の砕かれた心は、しかしながらその時、この私をしかも今現に生かし、私たらしめている大いなる力にはつきりとうなづいているのであり、この目覚め、このうなづきを信というのである。そしてこのようない目覚めこそ、純粹無雜に「我信ず」といわしめるものとなのである。この光景が後に、「如来我となりて我を救う」と厳密にいい当てられることとなつたであらう。

信ということは、容易ならぬ問題である。それを起こすことも容易でないと同時に、信を正しく了解することも亦容易ではない。その信について、私は清沢満之の信念に教えられて、ほぼ以上のように了解するものである。それが又、御自身の信を「帰命無量寿如来、南無不可思議光」と表明せられた宗祖のお心に背くものでないことを、ひそかに思うておるものである。

ヤスパースの世界史観

大谷大学助教授 寺崎峻輔

個々の人間の相異を超えて、あらゆる人間に共通な一つの世界を提供せんとする試みは、ヤスパースが終始心掛けてきた基本的態度であると言えるのであるが、ここではかかるヤスパースの基本的態度から、彼が世界史をどのように把えているのかについて観てゆきたいと思う。

先ずヤスパースに従い、彼の世界史の図式から考察すると、彼は世界史を次のような四つの段階に区分する。それは一、先史時代、二、古代高度文化の時代、三、枢軸時代、四、科学的・技術的時代の四つである。

先ず第一段階の先史時代 (Vorgeschichte) とは、紀元前五千年以前であり、火が発見され、道具の使用がはじまり、言語が発生した時代である。それはプロメテウスの時代と呼ばれるものであるが、この頃にはじめて人間は人間たらしめられ、歴史の入口にはいりこんだと考えられる。

次に第二段階の古代高度文化の時代 (die alten Hochkulturen) とは、紀元前五千年から三千年の時代であり、エジプト、メソポタミア、インダス河流域、少し遅れては黄河の流域において高度の古代文化が発生した時代である。この時代にはじめて文字が作られ、歴史的記録がはじまるようになったが、このことによって人々は愚昧な自意識から解放され、自己自身に目覚めるようになったと考えられる。